

「みんなが安心してくらすために」

松山市立道後小学校 3年 ^{きたち}北地 ^{ゆうき}勇輝

「ひなんしじが出て、ばあばは家においていいからね。」

7月12日、松山城城山のしゃ面がくずれ、3名の人々がぎせいになった。そのテレビニュースをみながら祖母が話をしたのだ。ぼくはさいしょ、何を言っているのか分からなかった。ひなんしじが出る時はきっと、自分のそうぞうもできないさいがいがおこっているだろう。みんながおそろしくて心細い気持ちになっているはずだ。その中で、家ぞく1人だけをのこしてひなんする、はなればなれになることは考えられないと思った。

この夏、家ぞくとぼうさいグッズ、ひなん場所のかくにんをした。さらに、祖母に安心してほしいと思い、ひなんルートも家ぞくであるいた。

「ほら、だいじょうぶ。あるけるよ。」

と言っても、祖母はだまったままだった。さいがいがおこっていない道だから、何の不安もなくあるくことができたのだと、ぼくは気がついた。大雨がふり、土しゃが流れ、地面も平らではないじょうきょうかもしれない中で、ひざのわるい祖母は、家ぞくにめいわくをかけられないと思ったのだ。

祖母のように、体力に自信のない人たちのひなんはどうすればいいのだろうか。まずは、その家に、ひなんの手助けをひつようとしている人がくらしていることを知ってもらうことが大切だ。はあくする支えん者は1人、1か所ではいけない。さいがい時、ひなんを支える人もどんなじょうきょうかわからない。多くの立場の人に、はあくしてもらうことがひつようだと思う。つぎに、道ろ、公園、たてものなどのせいびだ。ぼくの家ぞくは昔からみかんを作っている。山まで行くとちゅうにさぼうダムがある。さぼうダムは土しゃをせき止めるはたらきがある。じっさい、7月12日の大雨の日も、祖母のみかん山は大りょうの水が流れていたが、さぼうダムの上流で小さな石やたおれた木は止まり、どろ水だけがダムの下流に流れていたそうだった。土しゃさいがい不安な場所には、このように、いのちを守るしせつができると、さらに安心する。さいごに、「いのちを守る早めのこうどう」はもちろん大切だが、「生きることをあきらめない」そう思ってもらえるような支えがひつようだったと思った。1人ではない、みんなといっしょだと思えることができる、不安をとりのぞく支えんだ。ぼくはこれから、もっとさいがいについてべん強し、祖母だけではなく、1人でも多くの人々が「生きるためにひなんをする」と思える支えんについて考えていきたい。みんなが安心してくらすことができる町にすること。それは、さいがいがおこった時に、支えんする人も支えをひつようとしている人もすばやく動くことのできる町につながると思う。

「土砂災害から身を守るために」

愛南町立御荘中学校 2年 ^{いなだ}稲田 ^{なぎさ}風沙

私が生まれたのは、愛媛県の最南端、愛のある町、愛南町の中でも自然豊かな地域です。

地域の人との交流が盛んで、登下校中も、挨拶を交わしたり、時には野菜をいただいたりすることもあります。また、とても自然が豊かな場所で、家の近くには川や山、池や田んぼがあり、朝には鳥の声が、夜には虫の声が聞こえてきます。

そんな地域ですが、ここは土砂災害警戒区域にかかっている範囲がとても広いのも特徴です。また、一部では、土石流危険区域、土砂災害特別警戒区域、急傾斜地崩壊危険箇所など、他の地域に比べて土砂災害を人一倍、警戒しないとイケないところにあります。

小学校5、6年の総合的な学習の時間の時に、私たちは防災マップを作りました。地域のマップを先生に印刷してもらい、みんなでペンを持って、

「ここが危ないポイントだよ！」

「ここは確か避難訓練をした時に、避難した場所じゃなかったっけ？」

など、自分たちの知っている情報をどんどん書き込んでいき、一通り情報を確認した後、3、4時間かけて地域をみんなで探検しました。

探検をしている最中には、崖がむき出しになっているところや、地震が起きた時にも安全に進めそうな道路や土砂災害が起きないと想定できる場所などにそれぞれマークを付けました。すると、私たちが知らない危険な場所がまだまだたくさんあることに驚きました。探検した後、防災マップに危険箇所や避難経路など、新しく知った情報も書き足しました。この防災マップは、地域の人にも見てもらえるようにしたので、もし、災害が起ってもみんなで安全に避難できると思います。

そして、防災マップを作った後、どこで土砂災害に被災しても対処できるように、家族と話し合いました。避難する道や避難場所、地震が来る前に備えておくことなどを話し合いました。もし、土砂災害が起こったら、建物の倒壊、火災の発生などに気を付けながら、地域の小学校に避難することを決めました。集合場所を1か所にしたので、安全に注意しながら家族の安否確認ができるようにします。

そして、中学生になり、家族から2つのミッションが出されました。

1つ目は、私の体力です。中学生になった私は、美術部に入っており、毎日楽しく活動しています。しかし、体育の授業以外では、全く体を動かしていません。もし、土砂災害が起こったとき、逃げ遅れることを家族全員に心配されました。そこで、今のうちから走ったり、散歩をしたりして体力づくりをしています。家族からは災害が起こったら、すぐに逃げられるようにしておくことを言われました。

2つ目は、防災リュックの準備です。今まで、食料品や飲料水を入れていませんでした。このままではいけないので、そろそろ準備をしようと話し合おうとしていたときでした。今年の7月、松山市で土砂災害が起こりました。松山城の近くのマンションや住宅に土砂が流れて、ロープウェイや松山城も立ち入り禁止になっているのをニュースで見ました。亡くなった方もいて、住民の方の避難も長かったと聞きました。本当に土砂災害は、身近に起こる災害なのだ改めて実感しました。家族で大急ぎで荷物を作りました。

この暑い中、土砂災害で避難した場合、熱中症が心配です。飲料水は欠かせません。しかし、自分が避難するときに持っていく荷物の量は限られています。家族に、

「風沙が持って逃げられる水の量は何本？」

と聞かれましたが、まだ体力がないのでとりあえず1本だけ入れました。また、持っていく食べ物も決めました。熱中症を防ぐため、飴や乾パン、レトルト食品、カップラーメンなど塩分、糖分を意識した日持ちがするものを入れておこうと話し合いました。話し合っているときに、夏に避難する時と冬に避難する時は持って逃げる荷物を変えないといけないことに気付きました。次は秋ごろに話し合う予定です。

今現在、私が住んでいる地域は安全に過ごせています。しかしこれから起こるかもしれない災害に対して備えをし、自分の命は自分で守ること、そして家族や地域の人々の命を守れるように、今のうちからできることをこれからも行います。

「命の安全はこの一歩から」

宇和島市立城東中学校 2年 ^{ほそかわ}細川 ^{も か}萌夏

「怖くて仕方がなかった・・・。」

いとこの口から出てきたのはこの声。みかんの産地で有名な宇和島市吉田町。自然豊かな山や、海が美しい地域だ。彼女に、とんでもない大災害が襲ってきたのである。異様な音と雨量、押し寄せる土砂。そう、これは2018年7月の早朝に発生した西日本豪雨での出来事だ。

ずっと雨が降り続けている。なんとなく、胸騒ぎがした。当時、8歳だった私であったが、はっきりとした記憶がある。近所の山は斜面がいやな音を立て始めたと思ったら、ごう音と共に、一気に崩れた。その近くの川は氾濫し、道路は水浸しになった。これらの光景を私は忘れることはできないだろう。

吉田町に住んでいたいとは、みかん山から崩れてきた土が、大量の水と混じり突然の大規模な土石流になったという。建物を押しつぶすという被害によって亡くなられた方もいた。大雨と土石流によって、避難せざるを得ない状況に陥った方が多く、復旧のための後片付けに追われる生活が長期間続いていた。

いとこの家族は1ヶ月ほど、比較的被害の少なかった私の住んでいる地域に避難してきた。しかし、「早く、家に帰りたい。」と言っていたことを覚えている。恐ろしい体験だったし、寂しくてつらかったんだろう。この土砂災害は大きな被害をもたらした。吉田町を含む宇和島市では、関連死を含め、計13名の方が亡くなった。

7月は災害が多いと実感した出来事が、今年もまた、発生した。それは12日に起きた松山市内での土砂崩れ。その日、学校は午前中だけの授業だったため、暑さに疲れていた私は、帰ったらすぐに寝てしまった。起きたのは、午後4時半頃。何気なくスマートフォンに目をやると、友人から何件かメールが来ていた。「松山で土砂崩れがあったらしいよ。」大雨が降っていたことは知っていたが、土砂崩れが起きるとは少しも思っていなかった私は戸惑いつつもテレビをつけた。城山の一部が崩れ、土砂が民家に流れ込み、跡形もなく1軒の家が押しつぶされている。近くのマンションにも、木々を巻き込んだ多量の土砂が襲っている、そんな光景が目に入ってきた。

画面に映る「松山城付近で土砂崩れ、3人が行方不明」のテロップ、住宅地になだれ込む土砂、救助活動をする人達。時間を置いてSNSでこの災害について調べてみると、救助活動中にも土砂崩れは繰り返し起こり、警戒に当たっていた消防車すら流されたという。この土砂崩れは、最終的に死者3名という被害を出した。

災害は、いつ起こるか分からない。また、いつ命を落とすかも分からない。「はてしてそうだろうか。」と疑問に感じた。テレビでは毎日の天気予報を発表している。高温になると熱中症注意、台風が近づくとその進路、大きさ、強さなどの情報を伝えてくれている。8月には、南海トラフ地震臨時情報の「巨大地震注意」が1週間NHKで表示されていた。

日本は、山地が国土の6割を占めていて、平地が狭いため、山の斜面や谷の出口など、土砂災害が起きやすい場所にたくさんの人が住居を構えている。これにより、土砂災害が増える原因となる。

では、どうすれば、大規模な土砂災害から自分自身の命を守ったり、被害を少なくしたりすることができるのだろうか。解決のための一歩は、正しい情報を得て、冷静な行動をとることだ。考えをまとめてみよう。

まず、自分が住んでいる地域が土砂災害警戒区域なのか、ハザードマップで確認することだ。市町村で作成されているものを活用しよう。津波、高潮、浸水予想などの防災マップは、地域を知る有効性をもつ。

次に、土砂災害の前兆現象に注意することだ。土砂災害警戒情報と気象庁のホームページにある土砂キキクルの発表も避難所へ行く目安となる。地鳴りがしたり、小石がパラパラと落ちてくるなどといった何らかの前兆現象に気づいたら、周囲の大人に知らせ、いち早く安全な対応をとることが大事だ。

最後は、「日頃の備え」として避難する際に必要な物をまとめておくこと。防災バックやヘルメットを用意していたら、土砂災害だけではなく、地震などでも命を守るために役立ち、安心につながる。家族で話し合い、離れていても会える「集合場所」も決めている。「備え」は、水や食料などの物品だけではなく、心の備えも大切なのだ。

つまり、「いつ」「どこで」「どんな災害」が起こっても落ち着いて、正しく判断することが大切なのだ。災害への対策や備えを万全にするとところから始めよう。自分の身を守る行動を知れば、他の人の命を守ることになるのだ。

「みちかだったどしゃさいがい」

今治市立吉海小学校 3年 ^{やの}矢野 ^{りの}莉望

わたしが3才のころの平せい30年、西日本ごう雨さいがいがありました。わたしはまだ小さかったのでそのことをおぼえてないですが、りょうしんからその時のことを聞いたりしました。

主にはえひめけんの南の方、南予地方で川がはんらんして多くの家が流されたり、たおれたり、水が上がったりしました。そして、ざんねんなことに30名をこえる人がなくなったそうです。

しかし少しはなれた地いきのことだと思っていたら、わたしのすむこの吉海町でも大きな土しゃくずれが何か所もあり、お1人の方がなくなったことを知りました。

うちの前の小さな水ろでも道ろまで水が上がってきてもう数センチメートルで家の中まで入ってきたそうです。

そのご、自ぜんと水は引いていったのですが、当ぜん、道ろの上はゴミやドロがいっぱいのこっていて、それをご近所のみんなできょう力してかたづけたそうです。

その話をりょう親から聞いて、わたしはこわくなりました。さいがいはいつおこるかわかりません。その時も1時間もかからないくらいの時間で水が上がってきたそうです。きゅうなごう雨もじしんもとつぜんやってきます。

テレビでもひなん所での様子を見たり、学校でもぼうさいくんれんをやったりします。家ぞくでも「もしも」の時のことを考えておかなくてははいけません。

そんなことを思っている時に、松山でごう雨によるどしゃくずれがおきました。きょ年の秋に家ぞくで登った松山じょうです。自分が行ったことのある所がくずれたのでびっくりしました。

わたしは今までそのようなさいがいにあわなかつただけでこれからもあいたくないけど、いつどこであうかわかりません。だからこれからちゃんと学んでじゅんびして、まずは自分のこと、大切な家ぞくのことを守れるようになりたいです。そして、うちの前に水が上がった時のように、みんなときょう力して地いきのやくにたちたいです。

「土砂災害と地域の中の私」

松山市立三津浜中学校 2年 こばやし はると 小林 悠人

令和6年7月12日、私の住む松山市で土砂災害が起こり、3名の命が奪われました。つい半年前に松山城に登ったこともあり、とても驚きました。こんなに近くの山がくずれたことを聞いて、自分の家の近くの山がくずれたら大変だ、と考えたり避難となってしまうたらどうしようともありました。また土砂が流れることで家がこわれたり犠牲者が出ないようにも対策が必要だと考えました。

私の父は松山市役所の市民防災安全課というところに勤務しています。地震や台風で松山市に対策本部ができると、その「本部の人」になります。今回の土砂災害は、全て想像していなかった出来事だったので、夜中に召集がかかり、あわてて出勤して行きました。土砂災害はその町に住んでいる人や住んでいない人も巻き込むとても大変な自然災害だと分かりました。また自然災害はいつ起こるかが分からないのでとてもこわいなと思いました。日ごろから身を守る行動をするのもとても大切だと思います。

父に、土砂災害から身を守るために必要なことは何か、聞いてみました。父は「自助と共助という考えを持つことだ。」と言いました。「自助」というのは、土砂災害から自分や家族の身を守ることで、

- ・気象情報に留意すること
- ・行政からの避難情報を細かくチェックすること
- ・非常食や防災リュックをすぐに持ち出せるよう、場所や中身を把握しておくこと
- ・まだ大丈夫、と思わず早目に避難すること

などが挙げられるそうです。この「自助」はなんとなく想像できたのですが、「共助」という言葉がよく分かりません。すると父は、

「ウチの町内のことを考えてみたら、分かりやすいかも。」
と言いました。

私の住んでいる地域では、町内行事がとても盛んに行われています。秋祭りはもちろん、町内運動会、公民館主催のスポーツ大会、夏祭りなどたくさんの人と人が集まります。私も運動会で走ったり神輿を担いだりするのですが、ずっと単なるレクリエーションだと思っていました。

しかし、町内会長さんが行事の打上げの度に言うそうです。

「こうやって町のモンが顔を合わしとったら、災害の時に助け合える。遠くの親戚より近くの他人。人と人とのつながりは大事なんよ。」

と。いつもは普通にやっている地域行事だと思っていた私は驚きました。この地域行事がこんなに奥が深く考えられているなんて。ただ楽しむだけの地域行事ではないことを知ってやっぱり人と人とのつながりは大切だとよく分かりました。これらの地域行事に参加することによって、楽しむだけでなく地域のつながりを大切にし、いつ起こるか分からない災害が起きてしまったときにつながっているか、つながっていないかでは大きな違いがあると思います。災害は必ず起こらないとは言えません。それが起こった時に地域の人々が助け合って、支え合って避難生活を送れば助け合えない場合とはどのような点でも大きく違うと思います。そのためにも、地域のつながりを保つためにも地域の行事への参加はとても大切だと思いました。

町のホームページにも、災害時における「共助」を目指していると書いてありました。今度、9月1日に災害時に備えた「安否確認訓練」というのがあるそうです。これは、災害時に住民の安全を確認するために、家族が無事だということを近所の方に知らせることができるよう、玄関に「何か黄色い物を提示するという、防災意識を高めるものです。去年は知らない間に母が済ませていましたが、松山城の土砂災害で災害が身近に感じられたこともあり、自分でやってみたいと思います。松山城の土砂災害があったことで、今までどこか他人事だった土砂災害が一気に身近なものになりました。「土砂災害を防止する」ために一人一人ができることは少ないかもしれませんが、

- ・「自助」と「共助」という意識を持つこと
- ・地域の方がいろいろ考えてくださっているように「地域のつながり」を大切にすることを日々意識しながら、これから来るかもしれない南海トラフ地震に備えていきたいと思います。

「土砂災害の恐ろしさ」

松山市立勝山中学校 2年 ^{かどた}門田 ^{いちか}一花

7月12日の早朝、けたたましいスマートフォンの警告音で母と私は跳び起きた。昨晚からかなりの雨が降っていた事は知っていたが、まさか自分の校区内で土砂災害が起こっているとは。警告音は大雨警報のものであった。今回勝山（松山城）の東斜面で土砂崩れが発生し、消防団の活動をしていた友達のお父さんから本当にすごい勢いで土砂が流れていた、と聞いた。ニュースの映像でも私も通ったことがある道が埋もれていて怖くなった。そしてその一瞬で亡くなられた方がいたり、大切な物を失ったり言葉では言い表せない程の爪痕が今も残っている。

私が小学生低学年の時には、後に西日本豪雨と呼ばれる災害が起こった。広島県中心に、237名、内愛媛県でも31名の方が亡くなったそうだ。私の曾祖母は松山市西谷に住んでいたが、離れの家が全壊した。石垣を積んだ高台にあった家でとても見晴らしが良く、遊びに行くと必ず「やっほー!」と叫ぶ位素敵な場所だった。石垣から水が溢れ出し崩れ、庭にあった植木や花が大きな石と一緒に何メートルも下の道路まで崩れ落ちたそうだ。家の柱はバキバキと音を立てて折れ、屋根の瓦がガラガラと落ちあつという間に家が崩れてしまった。曾祖母は母屋にいたので無事だったが、とても驚いたし、夜中に起きた事だったので本当に恐怖でしかなかった、と手を震わしながら話してくれた。

後日、現場に母と行き想像していた以上に無残な景色を目の当たりにしショックだったことを覚えている。春になると親せきと毎年お花見をしていた家のシンボリックな桜の木もそこには無くなっていった。

松山のすぐ南には中央構造線が走っている所以山が崩れやすいそうだ。構造線の北側は領家帯と呼ばれ、和泉層群や領家花崗岩などが分布し、これらの岩石の風化が進んだ部分は水に弱く大雨で崩れやすい性質を持っている。松山の地質を考えると集中豪雨による土砂災害は起こり得る事だ。また土砂災害の発生の恐れのある「土砂災害危険箇所」は市内に1,280ヶ所もあるそうだ。土石流の速度は時速30~40キロメートルもあるので、発生してから避難しても間に合わない。土砂災害には前兆現象（サイン）がよく見られるそうだ。例えば、土石流のサインとしては、川の流れが濁り、流木が混じり始めたり、山鳴りがする。がけ崩れのサインとしては、がけから小石がパラパラ落ちてきたり、斜面に亀裂やはらみが見られる。また、がけから水が湧き出ているなど。地すべりのサインは、地下水や湧水の急激な変化、地割れができる、斜面から水が噴き出す、と言ったものだ。それらのサインを知り早目に自主避難するべきだと思った。また、このようなサインに気付いたら消防などに連絡し、地域の人達に情報共有することも大切だと感じた。

今までテレビなどメディアを通して土砂災害の様子が映像で映し出されるのを見ただけでも恐ろしいと思っていた。それが実際、石垣が崩れ昨日まで穏やかに建っていた家が崩れ落ちた現場を見て、台風や大雨、大風など自然の強さや脅威を思い知らされた。自然災害にはなかなか勝つ事は難しいかも知れないが、身を守る事を第一に防災マップやハザードマップを確認したり、前兆サインに気を付けて安全な場所に身を置いたり、防災に備えなければと肝に銘じた。そして、1人でも多くの方が日頃から準備をしておくことで、誰かの大切な人の命を守ったり、曾祖母のように怖い思いをすることがないようになればいいと思う。

今では取り壊されて平地となった曾祖母の離れの家があった場所は、何事もなかったかのように草が生え野花が咲き、虫の住処となっている。

「今、大切なこと」

松山市立南中学校 2年 ^{くぼた}窪田 ^{せな}惺心

それは、雨が続いている日だった。でも、今日の雨はひと味違う、そう感じた夜だった。まだ夜も明けていない中、それは起きた。僕もニュースでそれを知り、耳を疑った。

「松山城で土砂災害が起きている。」

このニュースを見て僕は、体中に衝撃が走った。3人もの人が命を奪われ、周りの家の人も避難を余儀なくされたそう。なぜ、この土砂災害が起きてしまったのか原因を調べたところ、表面を覆っていた土壌が崩れ落ちる「表層崩壊」が起きたことや、工事をした際に盛られた盛り土の部分と山側の境界で生じたということなどが分かった。また、6年前の西日本豪雨も関係していて、この大雨直後に数メートルにわたる傷が発見された。この傷が悪化して、今回の土砂災害が起きたのかもしれない。聞いた話によれば、今回松山城の土砂災害が起きた場所は、以前から危ない場所と有名だったようだ。僕も実際に松山城の周りを歩いてみたことはあるが、危ない場所は確かに何か所かあったと思う。

大雨はまた次いつ降るか分からないし、これからの季節は台風が増える。たくさんの不安と心配が募る一方だが、これらはすべて防ぐことができると僕は思う。なぜなら、本気で勉強したらテストでいい点がとれるように、本気で対策すれば未然に防ぐことができると思うからだ。

それを防ぐために大事なことを、僕は2つ考えた。1つ目、僕は、ハザードマップの大切さをもっと世の中に広めることが大事だと思う。ハザードマップを知っている人は日本全体でどのくらいなのか調べてみると、2021年時点で全体の4割程度と、あまり高くない水準だった。また、使ったことがない、知らないという人が全体のうち2割もいてとても驚いた。僕もハザードマップは持っているが、その地域の避難場所や各災害が起きたときの危険な場所が記載されており、とてもためになる。このように、対策するうえでハザードマップは欠かせない。だから、僕はハザードマップの大切さをもっと世の中に広げていったらいいと思う。仮に、もうハザードマップの存在を知っていて避難場所の確認ができていてという人がいるかもしれない。そういう人は、少し先のステージに進んで、避難するときに必要なものを事前にまとめて準備しておいたり、避難したときに家族で離れられなくなってしまったときの集合場所を、家族で話し合うのもいいと思う。

2つ目として僕は、「自助、共助、公助」の気持ちをもって普段から過ごすことが大事だと思う。僕自身、まだ実際に災害を経験したことがなく、災害がどれほどのものなのか想像がつかない。災害を経験したことがないということは奇跡でありうれしいことだが、南海トラフや土砂災害などの災害は次いつ起こるか分からない。そのための準備として、この言葉が大事だと思う。この言葉は、小学校の授業で習った言葉であり、自助は一人一人が自ら取り組むこと、共助は地域や身近にいる人同士と一緒に取り組むこと、公助は国や地方公共団体などが取り組むこと、という意味がある。知らない人や忘れていた人がいるかもしれないけど、この言葉には共通の意味があると僕は思う。それは、助け合うことの大切さを訴えているという点だ。人は災害にあったとき、パニックを起こして体が動かなくなってしまう、というのを聞いたことがある。こういうことになってしまうと逃げ遅れて災害に巻き込まれてしまう危険が高くなる。このような人を見逃さないようにするのが、やはり大切になってくる。そのためにはお互いで助け合うという選択肢を持っておいた方がいいと思う。どんなに助けたい人がいても1人では救えないものがある。だから、共助や公助といった自助以外の考え方を持ってみんなで助け合っていければいいと思う。

土砂災害は、台風や地震に比べてあまり身近に感じていない場合が多いように思うが、他の災害と比べて被害が一気にくる。そのため、起きてからではもう遅く、大きな被害に巻き込まれてしまう。だからこそ事前の準備が大切になってくるし、その分心構えも必要になってくる。でも、土砂災害には前兆があり、「がけや地面にひび割れがある」や「井戸や川の水がいつもより濁っている」などで、いつもと違うと感じたことがあれば、すぐに準備することも必要になってくる。

ほとんどの災害は自然現象であり、予測ができるものもあれば、できないものもある。だが、自分たちで防ぐこともできる。どんな災害が起きても、リスクを最小限に抑えることで被害も少なくなる。だからこそ、僕たちは準備することが一番大切なのだ。